

発問について考える

教育界の現状

「活動あって学習なし」とは、よく聞く言葉です。「支援あって指導なし」「ハウツーあって理論なし」という言葉もあります。教師の不勉強に由来するのでしょうか。自信のなさはないのでしょうか。それは、超多忙による研究時間の少なさからくるものなのでしょうか。

普段は忙しくて無理ならば、その灯を消さないで夏や冬のまとまった休業中に充電するという手もあります。安易な答えを求めず、根本原理を、理論を勉強するようにします。すぐに役立つようなものは、またすぐに役立たなくなってしまう。理論を軽視する人は、すぐに行き詰まってしまう。ドイツの哲学者であるカントの言葉に「理論なき実践は盲目であり、実践なき理論は空虚である」というものがあります。

子ども主体の授業

授業は生き物です。教師と子どもとのダイナミックな相互作用のプロセスです。どんなに子ども主体の授業であっても、教師は授業を組織するオルガナイザーです。子ども中心の授業は、教師主導型の授業よりもはるかに大きなエネルギーと高度な指導技術が教師に要求されます。子どもに自由に活動させながら、しかもそれに流されず目標を達成できるような授業をすることは至難の業です。綿密な指導計画を立てることは重要ですが、実際の授業の場では、それに縛られてはいけません。一旦それを忘れて頭を空っぽにして授業に臨むことが大切です。

発問をつくる

授業づくりの最終局面は、発問づくりと言ってもいいぐらい発問は授業を支える大きな柱と言えます。優れた発問は、深い教材研究と的確な子どもの実態把握、そして本時の目標に迫る指導過程の吟味や検討の中から生み出されてくるものです。子どもの学ぶ意欲や多様なものの見方・考え方を引き出す発問によって、授業は劇的に変わります。一口に優れた発問と言っても、教科の特質や課題把握・解決・まとめの各段階によって備えている要件は様々です。

発問をつくり出していく一例を紹介します。

- (1) 本時の課題及び課題解決に向けて考えられる発問を可能な限り書き出してみる。

課題くだきの発問です。課題が包含している内容の明確化であり、どれだけの発問がつけられるかによって、授業者の教材解釈の深さが問われます。

- (2) 書き出した発問に対する予想される答えを書き出してみる。

子どもたちの教材に対する興味・関心、思考の傾向性等の実態把握の力が鍵を握ります。このとき、発問と質問を区別することです。答えが一つのものは質問でしかありません。

- (3) 子どもたちの見方・考え方をゆさぶり、多様な思考を促す発問を絞り込む。

発問の絞り込みは、扱う資料や事象提示と結び付けて行います。また、授業者が期待するプラスの反応だけでなく、マイナスの反応に対する補助発問も準備しておく必要があります。

- (4) 指導過程と子どもの思考のプロセスに沿って発問を並び替える。

易から難、拡散化から焦点化と、子どもたちの思考にゆさぶりをかけ学習意欲を引き出す発問の組み方が大切で、同時に発問の構成は、板書の構成とも深く関わってきます。